

当会の重要なメンバーでおられた山本玲子さんが亡くなりました。これで山本家とのご縁が薄くなることに大きな残念さを感じているのは私だけではないだろう。追悼としてご夫妻との長い期間のお付き合いの中で特に印象に残ったことを少しお話ししたい。

& 1

ご主人の英二さんと最初にお会いしたのは東京にエストニア大使館を設立するための打ち合わせのため、どこかのホテルで初代臨時大使に内定しておられたヘイキ・ヴァルステさんと二人で面談をしていた際(1996年7月)、オルガニストの児玉麻里さんが、ターリンのヤルヴェオツァ高等学校の日本語講座の講師として近々赴任予定の山本氏を連れてご紹介に来られた時であった。紹介された氏は温厚な笑顔が素敵で、すでに会社を退職され悠々自適の生活をされていたようだった。当時再独立して若者を中心に国づくりを急いでいたエストニアが日本との交流を希望して、ささやかではあるが、本格的な日本語教育を行うための、教員を募集することになって氏が名乗り出られたのだそうだ。児玉さんはすでに何回も演奏会のため同国を訪問され、その日本語の講師探しを先方の外務省から非公式に依頼されていたらしいのだが、一人でいろいろなことを大声でまくしたてられたのでその時は結局、山本さんとはほとんど会話ができず、もうすぐ8月に出発されることだけがわかり、次回私が同地をおとずれる際の再会を約したに過ぎなかった。

& 2

当時のエストニアの状況の中で先生ご夫妻がいかにご苦労されて日本語のクラスを立ち上げられ、そればかりか個人授業や幾多の日本紹介の文化活動を熱心に行われたかは先生が出版された「エストニアで日本語を教える」(朝日カルチャーセンター刊)というご著書に詳しいが、現在のエストニアと日本の強力な友好関係は再独立後の本当に初期にご夫妻が3年近くにわたって行われた交流活動抜きには考えられないだろう。当時はエストニアに住みビジネスを本気で起こす日本の会社や個人はまだ少なく、大半はエストニア語の習得のための留学生で大使も在フィンランド大使の兼轄であった。このため現地での日本人の集いは代理大使及び先生ご夫妻とほぼ同時期に同じ日本語クラスの講師として赴任された高橋先生ご夫妻が何かと中心にこなされており、私のターリン出張の際は先生方と会食してご苦労話を伺うのが常であり、楽しみでもあった。ただ誠に残念なことはお二人の先生の価値観や教育方法に大きな差があり、お二人ともそれに悩まされていたのだろうが、小さな邦人社会では相談相手や解決方法もなくそれが小生には大変もどかしかった。この問題は山本先生が離任されるまで尾を引き、最後のころはターリンにお邪魔してもお二方別々に面談、会食するようにな

ったのは誠に不幸な事態であったといえよう。それでもお二人が日本語クラスを短期間で立派に作り上げ、そこから若いエストニア人の親日家が多く現れたことは実に喜ばしいことであり、改めて敬意をささげたい。

&3

3年近い滞在の記念と考えられたのか、あるいは近国ポーランドで先例があったためか山本先生は「サクラ・プロジェクト(桜基金)」を提唱され、日本の桜をエストニアで鑑賞できるよう募金を集め苗をエストニアに移植することに最後の1年それに熱意を込められた。日本側では当時釧路に本部があった当会にご相談があってまとめ役となり、立ち上がったばかりの我が支部もわずかではあったが、ご協力できたのは幸せであった。このアイディアは見事に成功し、200本の釧路からの「大蝦夷山桜」の苗は1999年3月に無事エストニアに到着、日本大使館前の道路や一部はターリン市の植物園にも植えられたのである。幸いこの桜たちはエストニアの風土にもよく馴染んでくれて4半世紀たった今日では毎春見事な花を咲かせ、市民にも親しまれている。私は残念ながら満開時に見たことはないのだが、大使館訪問の折にはその一本の幹に触れて「山本さくらさん」と呼んで先生の遺徳をしのぶことにしている。

&4

帰国された先生は、活発に国際交流活動が続けられ、勿論当会にもご夫妻で即、入会され、しばらくして監事のお役目を引き受けて頂き、いろいろご指導を賜った。帰国されて10年たったころ(2009年)釧路の本部機能が東京支部に移行するという話が出てきて支部長であった小職は他の3つの団体の責任者であったことから会長職を辞退し、山本先生にやって頂くことを強く望んで粘ったのだが、京都に滞在しておられた先生から「あなたを置いてだれがやるのか？」との強力な説得に応ぜざるを得なくなり、「先生が幹事として強かにサポートして下さる」ことを条件としてお引き受けすることとし、他の役員が内定していた会員とともに釧路へ引継ぎに赴いたが、その途次、1週間前に電話でお話した先生が急逝された旨の連絡があって呆然とした。引継ぎ式でも冒頭に全員で黙とうをささげたことは新本部の発足にあたって誠に残念なことであった。亡くなって数か月後、エストニアから私たちのカウンタナー・パートナーであるエストニア日本協会のヘイキ・ヴァラステ会長(元在日臨時大使)が来日され、共に山本先生のお宅に伺って、お悔やみをされたことも今では懐かしい思い出になってしまった。

&5

未亡人になられた奥方玲子さんはその後も熱心にセミナー等の倒壊の行事には体調が許される限りご出席になっておられた。またコロナ以前の渋谷でのセミナーの終了後は、同じ路線

で帰るためいろいろおしゃべりをしながら日吉まで行ったことが懐かしい。しかし何といても一番の思い出は新任で来られたレンズメント大使のお供をして何人かの会員とエストニア尾友好関係が強い佐久市を訪問した時のことだろう。帰途、時間があつたので隣の軽井沢をおとづれ、旧軽井沢での休憩時間に買い物には興味がなかった夫人を誘って旧軽の通りにあるミカド・コーヒー店の2階のテラスで名物の水漉コーヒーを飲みながらご主人とのエストニアでのご苦労話を伺って英二さんをしのんだことが忘れられない。

その玲子夫人も物故され、お二人のいなくなった協会だが、これからもエストニアとの交流活動は盛んになるだろうし、その一つの象徴たるターリン市の「山本さくら」も毎春咲き続けるだろうと思っている。

(了)